

(1) 1年目(平成30年度)

1. 趣 旨

7泊8日の移動型キャンプで、登山・自炊などの活動を、仲間と共に、最後までやり抜くことを通して、何事にも自信を持って取り組める力を育む。

2. 事業の日程・参加者

日程概要	プログラム(参加者)(小学校5、6年生 中学校1、2年生 計21名)	宿泊場所
7/15(日)	アンケート、仲間作り(AAP)、スプーン・フォーク作り	国立赤城青少年交流の家
7/16(月)	テント設営研修、野外炊事研修	
8/4(土)	開校式、仲間作り(アイスブレイク)、テント設営、野外炊事、登山講義	国立赤城青少年交流の家
8/5(日)	長七郎山(1,579m)登山	前橋市赤城少年自然の家
8/6(月)	黒檜山(1,828m)・駒ヶ岳(1,685m)登山	前橋市赤城少年自然の家
8/7(火)	ふりかえり、フォトフレーム作り、自炊(3食分)※地藏岳日の出登山・洗濯は雨のため、中止。	前橋市赤城少年自然の家
8/8(水)	自然の家～鍋割山(1,332m)登山～交流の家	国立赤城青少年交流の家
8/9(木)	交流の家～榛東村創造の森キャンプ場(24km)	榛東村創造の森キャンプ場
8/10(金)	榛東村創造の森キャンプ場～榛名富士(15km)、榛名富士(1,391m)登山～交流の家	国立赤城青少年交流の家
8/11(土)	ふりかえり(アンケート)、閉校式	

3. ねらいに対する成果と課題

満足20名(95%) やや満足1名(5%) やや不満0名 不満0名

- ①登山をメインとしたプログラムで、長七郎山・黒檜山・駒ヶ岳・地藏岳・鍋割山・榛名富士の6つの山を登り、赤城山から榛名山まで徒歩で移動する。(総距離約70km、標高差約3,000m)
- ②生活体験を重視し、自分のことは自分でやることを徹底する。
- ③毎晩ふりかえりシートで、テーマ「挑戦・協力・感謝」を意識させながらふりかえりし、自分と向き合う時間をとる。
- ④生活面においては、「あいさつ・食事・うんち」の3つのテーマで基本的な生活態度を養い、規則正しい生活を送れるようにする。

成 果

- ①「あいさつ・食事・うんち」の3つのテーマを掲げたことで、特にあいさつができるようになった。
- ②登山講義や登山中での実際の登山の仕方を指導することで、参加者が安全に登山をすることができた。
- ③毎日「挑戦」を意識してのふりかえりを行うことで、総距離約70kmの行程を自分の足で移動することができた。
- ④仲間とテント設営や野外炊事など、寝食を共にすることで、協力することや感謝することなどを学ぶことができた。

課 題

- ①キャンプのテーマを設け、キャンプ後にはテーマに沿った変容が見られるようにプログラム内容を見直していく。
- ②次年度は詳細な雨天時プログラムを作成する。
- ③今夏の猛暑のことを考えると、熱中症など懸念事項が生じるおそれがあるため、次年度は公道を歩く行程について検討する必要がある。

担当/企画指導専門職 小倉 祐司

(2) 2年目(令和元年度)

1. 趣 旨

7泊8日の遠征型キャンプで、登山・自炊などの活動を、仲間と共に、最後までやり抜くことを通して、何事にも自信を持って取り組める力を育む。

2. 事業の日程・参加者

日程概要	プログラム(参加者)(小学校5、6年生 中学校1、2年生 計23名)	宿泊場所
7/13(土)	参加者・保護者説明会、仲間作り、かなな著作作り、登山講義	国立赤城青少年交流の家
7/14(日)	交流の家～赤城不動大滝散策～交流の家	
8/3(土)	開会式、仲間作り、チーム旗作り、野外炊事、登山講義	国立赤城青少年交流の家
8/4(日)	交流の家～鍋割山登山・荒山高原～交流の家	国立赤城青少年交流の家
8/5(月)	交流の家～掃部ヶ岳・榛名富士登山～交流の家	国立赤城青少年交流の家
8/6(火)	洗濯、野外炊事、フォトフレーム作り、テント設営	国立赤城青少年交流の家
8/7(水)	交流の家～鈴ヶ岳・地藏岳・長七郎山登山～赤城山分校	赤城山分校(テント泊)
8/8(木)	赤城山分校～黒檜山・駒ヶ岳登山～交流の家	国立赤城青少年交流の家
8/9(金)	キャンプのまとめ・発表、パーティ準備、お別れパーティ(野外炊事・キャンプファイヤー)	国立赤城青少年交流の家
8/10(土)	ふりかえり(アンケート等)、閉会式・決意表明	

3. ねらいに対する成果と課題

満足20名(87%) やや満足3名(13%) やや不満0名 不満0名

- ①上毛三山のうちの二山である赤城山(地藏岳・長七郎山・鈴ヶ岳・鍋割山・黒檜山・駒ヶ岳・荒山高原)と榛名山(掃部ヶ岳・榛名富士)の9つの山をチームで踏破する。(総距離約40km、累積標高差約3,000m)
- ②基本的な生活習慣(早寝早起き朝ごはん)や挨拶、正しい言葉遣い、整理整頓などを重視し、あたりまえのことは、あたりまえにできることを徹底する。
- ③「プログラムデザイン」の工夫として、全体のねらい達成に向け、「ファースト」「セカンド」「サード」「ファイナル」の4ステージごとにねらいを設定し、活動のポイントやスタッフのかかわり方について明確にする。
- ④「ふりかえりの時間」の充実として、毎日のふりかえりの中で、「挑戦・協力・発見」のキーワードに対して、自分自身がどうであったかということについて自己評価していく。また、相互評価として、「All for One(一人のために)」を取り入れ、自分の良いところを仲間やスタッフからフィードバックしてもらう。

成 果

- ①毎日、「挑戦・協力・発見」のふりかえりを行ったことで、自分自身の目標について意識することができ、明日のめあてを考える手立てとなった。
- ②毎日、自分の良いところを仲間やスタッフからフィードバックしてもらう「All for One(一人のために)」のふりかえりを行ったことで、自己存在感や仲間のために役立っているという実感を得ることができた。
- ③キャンプの様子を、取材協力していただいた群馬テレビのニュース番組で3回放映したり、その映像(YouTube)を本所のホームページ上で配信したりすることで、参加者の保護者等に頑張っている活動の様子を届けることができた。
- ④23名全員が総距離約50km、累積標高差約3,000mの9つの山を登頂することができた。
- ⑤メインプログラムである9つの山の登山に挑戦する中で、やり抜く力が高まる効果が見られた。

課 題

- ①本事業で自己肯定感の教育効果量が上がらなかった理由としては、チームの人たちと力を合わせて事に当たるという野外炊事やテント泊等の協働場が足りなかったのではないかと考える。
- ②自己肯定感を高めていくために、他者と協力する場面や自己と向き合う機会を増やすと共に、人の役に立つ、人から褒められる、感謝されるといった経験がたくさんできるような活動内容を検討し、それらの体験について毎日ふりかえり、次の活動に生かしていく必要がある。

担当/企画指導専門職 田村 文明